

クラーク先生さようなら

札幌市医師会
コロンビア内科

小谷 晃司

「少年よ、大志を抱け」という台詞が長く北海道大学のスローガンとなっている。“BOYS BE AMBITIOUS.” 私はこれを「きみたち、もっとギラついてみせろよ」と訳す。当時、全国から選りすぐられた学生は資質に富み、ただでさえ勤勉な国民性に加えてそれぞれの故郷を背負っている彼らはモチベーションも高かった。教育する側としては申し分ないはずの素材と対峙して、なおクラーク博士がBE AMBITIOUSと説いた真意を計りたい。

札幌の姉妹都市であるオレゴン州ポートランドでは昨今KEEP PORTLAND WEIRDというスローガンが頻用される。こちらの私訳は「ポートランドよ、傾（かぶ）いておれ」。登場してから20年と経っていないはずだが、挑戦好きで変革を厭わない気質のポートランドっ子に膾炙して今や街の方々でこの言葉を見かける。そしてこちらはあくまでもKEEPだ。もしクラーク博士が農学校の生徒にAMBITIONを感じ、「いつまでもその気概を忘れるな」と声を掛けたかったのなら“KEEP YOU AMBITIOUS”とでも言っただろうか。しかし実際はBEだ。すでにAMBITIOUSである者に今さらAMBITIOUSになれと声を掛ける者はいない。

国のリーダーの養成が官立大学の使命ではあるが、そのリーダーシップはあくまでもお上の意向に沿い、その枠組みの中で発揮されるべきものであって、決して無制限な自律性は求められない。養成されるべきは革命家ではなく優秀な現場監督なのだ。生徒たちは与えられた課題をキッチリこなし、貪欲に知識を吸収していったことだろう。帰国後、文字通り山師として一攫千金を狙い、結果、夢破れて大きな訴訟を抱えたという一面を持つクラーク博士であればその素直さに感動すると同時に、その極端なまでの従順さには少なからず物足りなさを覚えたはずだ。BOYS BE AMBITIOUSというのは学生がAMBITIOUSでないことを憂いたクラーク博士からの叱咤、今風に言えば「空気を読み過ぎる優等生」を「煽る」言葉であったと考えてよいだろう。

クラーク博士がこの言葉を遺してから140年余、北海道大学は名称以外に変わるところがあっただろうか。私の卒業後、学内での飲酒は原則的に禁止となった。学祭は時間を削られ、ジンギスカンも許可制になった。令和元年10月には脅迫メールひとつで金葉の銀杏並木を愛でる会が中止となった。すべては「無用の」トラブルを避けるためと説明され、学

生も諾々とこれを受け入れた。暴飲を肯定はしない。急性アルコール中毒で命を落とした医進学生のことでは今なお胸が詰まる。しかし、真に学舎であるならば、世間に酒がある限り酒について考えることを放棄してはならない。闇雲に酒を禁じて幕を引くというのは最低のやり方だ。銀杏並木の一件も強行しろとは無責任過ぎてとても言えない。しかし、学生が議論して中止の結論に達するのと大学当局の一声で中止となるのとでは全く意味が異なるはずだ。後者はおよそ教育を授けるものすべきことではない。いずれのエピソードからも、自分の責任の及ぶ範囲で問題が生じなければそれでいいというメッセージしか受け取ることができない。

令和元年9月、北海道大学法学部の教授が中国で拉致された。それから1ヵ月余りが経過した時点で北海道大学のホームページに見つけることができたのは「先週末に本学教授が中国当局に拘束されたとの報道がありました。関係者の皆様には大変ご心配をお掛けしておりますが、現在、事実関係等を確認中です」という短文のみで、さらにしばらくして教授が無事解放されるまでの間、結局、遺憾も非難も抗議の声明も公式には何ひとつ発せられることはなかった。身内を守らない？ 声すら上げない？ 文部科学省や外務省などから緘口令でも出ているのかとも考えるがこれまでのやり口が頭に浮かび、どうせそこにあるのはただの付度、自主規制なのだろうという邪推が止められない。

クラーク先生、従順な猟犬より孤高の獅子たれとあなたに教えられた私たちは今、立派な座敷犬になりました。自分のアタマで考え、主体的に動くことはできません。だけど客人には吠えず、トイレの場所も間違えない。主（あるじ）に頭をなでてもらい、相分の餌を与えてもらうことだけで十分満足して日々を過ごしています。飼いやすい。あまりにも飼いやすい。クラーク先生さようなら。